



イトコのねーちゃんに  
女湯で射精させられ  
家でエロいことしてしまった  
夏の話



「ねねねーちゃん、もうヤバいっ……」

「出していいよ……♡」

田舎。夏休み。再会。あこがれ。  
変わったものと変わらないもの。  
おねショタはエモい

体験版

## ■ キャラクター紹介

力石 大地<sup>りきいし だいち</sup>

元気いっぱいで生意氣盛りの少年。

最上級生なのに新入生に間違えられるほど小さい。

性知識は友だちの兄貴から教わってそれなりにある。

去年はじめてのオナニーで精通した。



たかみね  
高峰 寧々

大地の四歳上のイトコ。

面倒見のいい快活な少女。

愛称は「ねねね」、「ねねねちゃん」。

三年まえに親の離婚で母の旧姓に変わった際、すぐなじめるようにと大地の母が呼びはじめた。

大地はそれ以前から「ねねねーちゃん」と呼んでいる。

ここ最近になってエッチなことに興味が出てきたばかりで、いろいろ調べてオナニーしたりフェラの練習をしたりしている。

何度か告白された経験はあるが彼氏ができたことはない。







いまかいまかと何十分も待ちわびていたくせに、インターフォンの音が鳴り響いた瞬間、りきいしだいち力石大地はあまりにびっくりして真上に大きく飛び上がった。

「ねねーちゃんだ！」

立ったまま寄りかかっていた椅子をひっくり返して、玄関まで全速力で駆けていく。

「ねーちゃん!!」

勢いよくドアを開けようと伸ばした手は、しかしむなしく空を切った。

「うわっ！」

一瞬早く外廊下に向かって開かれたドアの隙間からそのまま転げ出しそうになつて――。

「んぶっ!？」

なにか大きくてやわらかなものに顔がうずまり、弾力のあるそれに思いつきり跳ね返されて、大地は脱ぎ散らかしたスニーカーの上に尻もちをついた。

「ちょっと大丈夫？」

いくぶん大人っぽくなってはいるけれど耳慣れた笑い声に顔を上げて、

「ねねねーちゃん!!」

大地は顔じゆうをくしゃくしゃにして飛び起きるなり、三年ぶりの再会を果たしたイトコの高峰<sup>たかみね</sup>寧々に全力で抱きついた。

「おーおー、あいかわらずちっこいのに活きがいいな」

頭をわしゃわしゃとかき乱されて、全身が幸せな熱に包まれていく。

「ねーちゃんだってあいかわら——」

照れ隠しに強い語調で言いかけてから、大地は寸前まで顔をうずめていた目のまへのやわらかなふくらみをまじまじと見つめ、それから首を直角に曲げてイトコの顔を仰ぎ見た。

「あいかわらないね……」

「なにそれ。まあね、ちよつと成長しちゃったもんで」

にいつと笑うその顔にはむかしの面影がよく見てとれたけれど、まえに会ったときはほとんど身長が変わらなかったのに、いつのまにか頭ふたつぶんほど差ができて

しまっている。それに――。

「おっぱいでけー……」

制服のブラウスをぱつんぱつんに押し上げている眼前の双峰をしげしげと眺めてから、大地は吸い寄せられるようにしてふたたび顔をうずめていった。

「でしょー。高峰って苗字も伊達じゃないっていうかね。けどママだって胸でっかいし、あたしもいずれはこうなるって――てかコラ、いつまで人のおっぱい勝手に味わってんだ」

「ぶはっ……だつてすっげーんだもん。まえは真っ平らだったのに」

「真っ平らは言いすぎじゃない？ さすがに傷つくわ」

「いやいや、平野だったじゃん実際。なのになに？ あっ、噴火？ おっぱい噴火してでっかくなったの？」

「んだとコラ！」

笑いを含んだ声で怒る寧々に、ぎゅうつと頭ごと抑え込まれる。またもや大きな胸に顔ごと包まれて、さすがに大地は焦りはじめた。

（やばいやばい、ねーちゃんのおっぱい、やわらかくて、あったかくて、いい匂いで――

ちよつとちんこ勃ってきた……)

「こら大地、ねねねちゃんいつまで玄関に引き止めてんの！ お昼できてんだから早くこつち来な！」

いつもはうるさいばかりの母親の文句にも、このときばかりは救われた思いの大地だった。

「あつ、おばちゃんおひさー！ てかちよつと待って、この匂いはもしかしくても力石家秘伝のカルボナーラオムチャーハン!? よつし食うぞ大地！」

「んぶつ、ねーちゃん苦しつ……」

大地は寧々にヘッドロックをかけられた格好のまま、廊下を強引に引きずられていく。

——必死で腰をうしろに引いて、少し出っ張ってしまっている股間を隠しながら。



三年まえの夏休み、大地は寧々といつもふたりで過ごしていた。



そのころ寧々の両親が離婚を目前に控えていたため、よどんだ空気の自宅にいるよりずっといいだろうと、寧々の叔母である大地の母が力石家に彼女を招いたのだ。

大地は大地で共働きの両親をもつひとりっ子だったので、四つ年上でしっかり者の寧々が家にいてくれたら安心だからと寧々の母の遠慮を解いて、ひと夏の共同生活を送ることとなった。

大地と寧々にはほかに年齢の近い親類もなく、もともときょうだいのように仲がよかったこともあり、その夏はふたりにとって忘れがたい思い出になっている。

そんな思い出の日々を過ごした町を、いま三年の時を経て、ふたたび寧々と手をつないでいっしょに歩いていると、いつもはくすんだような田舎の風景が、なんだかやたらときらきら輝いて見えるのだった。

頭上の木々の隙間から降り注ぐ真夏の陽射しと蟬の大合唱を全身で受けようとしても、うみたいに、寧々はうーんと大きく伸びをする。つないだ右手が上へと引っぱられ、大地の片足が小さく浮いた。

「やっぱこのへんはいいなー。ごみごみしてないし、緑もいっぱいあるし」

「たまに来るからそう思うんだよ。オレ都会のほうがぜってーいいもん」

「それまたまに行くから思うんだよ。ずーっというとうんざりするから」

「ふうん。ないものねだりってヤツだね」

「お、わかってんじゃない。まあ実際あたしもいざここに住むってなったらむかしみたいに楽しいばかりじゃないんだろなって思うけどさ」

「そういうもんですか」

「そういうもんです」

にいつとこっちを見下ろして笑う寧々の顔の高さに、物理的な距離ばかりでなく、なんだか寧々が遠くへいつてしまったような感覚をふとおぼえて、大地はぷいっと顔をそらした。

「ねねねーちゃんさ、ほんとでつかわったよね」

「お？ またおっぱいの話？」

「ちがくて、背も高くなったし……」

「でしょー!? 背の順でいちばんまえだったのがさ、もううしろから数えたほうが早いくらいになったんだから。ちなみに胸はクラスでいちばんでかいっぱい」

「マジで!？」

「食いつきすぎ。だいちゃん会わないうちにおっぱい星人になっちゃったの？」

「ちげーよ！　ばっかじゃねーの！」

「まあひどいわ、さんざんあたしの大きな乳房を好き勝手に味わっておいで……」

「へっ、へんなこと言うなよ！　変態！」

「なんであたしのほうがそうなんの」

寧々はからからと笑って、きゅっと大地の手を握り直した。

「だいちゃんは？　だいちゃんも背の順いちばんまえだったよね」

「そーだ！　オレも先頭じゃなくなったんだった！」

「えっ、ほんと？　いま何番目？」

「二番！」

「……二番」

「うん、二番……」

高々と寧々の手ごと振り上げた腕を、しおしおと下ろしていく。

「あっ、でもさ、ひとり抜かしただけでもすごいじゃん。ちゃんと成長してんじゃん」

「転校生が……オレより小さい転校生が来てさ……」

「……そっか」

「けどいいんだよ！ オレいちばんまえのまま卒業しなくて済むんだから！」

「お！ それはめでたい！」

「だろ！」

「不幸中の幸い！」

「幸い！」

つないだ手をふたりで高く持ち上げて笑い合いながら、

（やっぱねねーちゃんだ。むかしとおんなじねーちゃんだ。おもしろくてやさしい、大好きなねねーちゃん……）

心の距離はちつとも変わっていなかったことを実感して、大地はたまらなくうれしくなった。

（でも――）

手で庇をつくって陽光に目を細める寧々を、ちらっと見上げる。

（ほんと見た目はすげー変わったよな……）

さつき大地の母親も、寧々に身長を抜かされたことにずいぶんと驚いていた。

存在を主張する胸もそうだけれど、制服のスカートから伸びる脚もすらっと長くて、膝より下は細く引き締まっているのに、太ももはむっちり肉をつけてどきどきするような曲線を描いているし、スカートを持ち上げるお尻だって男とはぜんぜん違う迫力がある。

顔の真横で歩くたびにぶるんと弾む白い太ももをちらちら見ながら、大地はしだいに股間に熱が集まっていくのを感じていた。

（三年まえはいつつもいっしょに風呂入ってたけど……）

あのころは身長も大地とどっこいどっこいだったし、体型だってほとんど変わらなかったのだ。寧々には悪いけれど、胸なんて実際、真っ平らも真っ平らだった。

（ちんこ以外はオレとぜんぜん違わなかったのにな）

ちらりとミニスカートの股間に目をやると、

「なに？ おっぱいよりもパンツが見たいの？」

目ざとく寧々に気づかれて、

「べっ、べつにそんなじゃねーし」

大地はあわてて顔をそむけた。

「いいよパンツくらい。ほらほらごらん」

寧々はいているほうの手でみずからスカートの裾を持ち上げ、大地に向かって腰を突き出すようにしてみせる。

「やつ、やめろって！ 誰か見てたら……」

「だいちゃんしか見てないって」

「オレも見えないっ——」

言いながら横目を向けて——釘づけになった。

「見てんじゃん」

「だって見せるから……」

びっくりするくらい白い太ももが、夏の陽射しを受けていつそうまぶしく輝いて見える。付け根までむきだしになった両脚のまんなかには、ちょこんと小さくて白い布きれが張りついているだけで、おへそのだいぶ下のほうまでが見えてしまっていた。

（女のパンツってこんなちっちゃいんだ……）

そのなかがどうなっていたか、三年まえの記憶を呼び起こそうとしてみたけれど、ちっとも思い出せなかった。



むくむくとペニスが起き上がってくるのを意識しつつ、ショーツの奥を透かし見ようとしてもするみたいにイトコの股間を凝視していると、

「やばっ、人いたわ」

前方遠くの人影に気づいて、寧々はあわててスカートを戻した。

それからしばらく歩くあいだ、寧々の太ももと下着の白色が、残像のようにまぶたの裏にこびりついて離れなかった。



「うあつっ！ ほんともう無理！ この町こんなに暑かったっけ!?」

隣町との境あたりにある公園まで足を伸ばし、ようやくそこで見つけた日陰に飛び込むなり、寧々はベンチにぐったりと沈み込んでしまった。

「温暖化はどこも同じだよ」

近くの自動販売機で買ってきたスポーツドリンクを大地が手渡すと、それを一気に半分ほど飲んでしまってから、寧々は小さく吹き出した。

「マジなトーンで言わないでよ」

「だってマジじゃん」

「そうだけどさ」

寧々はブラウスのボタンをいくつかはずし、胸元をばたばたとあおぎはじめる。

汗ばんだ白いふくらみが左右から寄り合い、まんなかにくつきりと深い谷間を刻んでいるのが見えて、大地はごくりとのを鳴らした。

その音をごまかすようにスポーツドリンクをごくごく飲みながら、寧々が頭上を覆う木々の緑を仰いで伸びている隙に、こっそりとあらわな胸元を観察する。

開いた胸元にはショーツと同じく白色のブラジャーが覗いていて、レースの縁取りの上に乳房の肉が段差をつくって少しはみだしていた。サイズが合っていないのはブラジャーばかりでなく、学校指定のブラウスのほうも残ったボタンのあいだに隙間ができていて、そこからも肌がちらちら見えている。

汗でびったりと張りついた白い生地は肌と下着の色を透かし、身体の線をくつきりと浮かび上がらせていて、服を着たままなのにやたらと性的に見えてしまう。大きく広げて投げ出された長い脚が汗でつやつやに濡れ光っているのもいやらしくて、これ

まで友だちの兄貴にさんざん見せられてきたどのヌード画像だって、いまの寧々と比べたらなんでもないようなものに思えるのだった。

暑さですっかりしぼんでいた性器が、イトコの無防備な肢体を眺めているうち、びくん、びくんと心臓の鼓動に合わせて硬く持ち上がってくる。

たまらずショートパンツの上からそれをつかもうと手を伸ばしかけたところで、

「あーっ！」

という叫びとともに寧々が急に顔を起こした。

あわてて腰を引いて見上げると、数秒まえまでの覇気のなさはどこへやら、弾けるような笑顔を大地のすぐそばまで近寄せてきて、

「ねえ、紺<sup>こん</sup>之湯<sup>ゆ</sup>ってまだあるの!？」

だしぬけに問いかけてくる。

「紺<sup>こん</sup>之湯<sup>ゆ</sup>? あると思うけど……あ、ほら」

公園のむこうに広がる家並みに視線をめぐるせ、ひょろりと伸びた煙突を見つけて指をさす。

「わっ、ほんとだ! いこいこっ、お風呂で汗流そっ!」

「えっ？ えっ？」

手を引っばられて立ち上がり、へっぴり腰になりながら待ったをかける。

「オレ着替えもタオルも持っていないよ！」

「あたしが持つてるから大丈夫！ 夏はいつもバッグに入れてんだよね。学校行くだけでも汗やバいことになるからさ」

「いやいや、ねねねーちゃんは大丈夫だけどオレはけっきょくそれでもだめじゃん！」

「パンツはあたしのでよければ貸すし、タオルはふたりで使えばいいしよ」

「パン……っ」

さっき見た白くて小さなショーツが脳裏によみがえり、ギンツと股間が硬くなる。

（お、オレのちんこにねーちゃんのあのパンツかぶせんのか？ 無理無理っ、エロすぎ

てちんこ死ぬっ……）

「まあパンツは冗談だけどさ」

（冗談かよ！）

「Tシャツは無地だから貸せるし、あとはタオルあればとりあえず平気でしょ？」

「それはそうだけど……ん？ えっ、ちょっと待ってよ！」

とんでもないことに気づいて大地はあたふたしはじめた。

「なにっ、えっ、それ、ねーちゃんといっしょに入るってこと!？」

「は？ そりゃそうでしょ。さんざんいっしょに行ったじゃん紺之湯。学校の子もぜんぜんあそこは来ないんでしょ？」

「そうだけど、そうじゃなくって!! あのころはちっちゃかったからいいけどさ、いまは——」

言いかけて口ごもると、寧々がにやにや顔を鼻先まで近づけてくる。

「ん？ いまは？ もうちっちゃくないのかな？」

「にっ、二番目、だしっ……あっ、ていうかそもそも年齢でだめじゃん！」

「その見た目なら平気だと思うなー。身分証確認するわけじゃないんだし」

「さすがにバレるって!」

「三年まえは平気だったのに？ そういえばセンチでいうと身長どんだけ伸びたん？」

「さ——ごっ、五センチは伸びた……と……思う……けど……」

「そんなくらいなら大丈夫だよ。あそこのフルーツ牛乳おいしかったよね。たまに思い

出してまた飲みたいなーって思ってたんだ」

寧々の腕が首にまわされ、そのままずると強引に日陰から引きずり出されていく。

「待つて待つて、ほんと無理だつて！」

頬に押しつけられた胸のやわらかさと甘酸っぱいにおいとに意識を持っていかれそうになりながらも、大地は必死に抗いつづける。

すると突然、寧々は動きを止め、ちよつと哀しそうな目で大地の顔を覗き込んできた。

「ねーちゃん、ひさしぶりにだいちゃんといっしょにお風呂入りたいなあ……また洗いつこできるかもつて、きょうずっと楽しみにしてたのに……」

「ねねねーちゃん……」

ちくりと胸が痛んだけれど、すぐにうそだと気がついた。

「紺之湯がまだあるかどうか知らなかったくせに！ 着替えも準備してなかったくせに！」

「ちつ、バレたか……てかだいちゃん、なんでそこまで嫌がるの？ どうせ知り合いいないお風呂なんだしさあ……あ、もしかして」



ふいに寧々は視線を落とし、大地の股間に目を凝らす。幸い焦りで平常時の状態に戻っていたため、勃起に気づかれることはなかった。

「生えてるの？ ちんちん、もう毛が」

ちんちん、と寧々の声で言われた瞬間、顔が真っ赤になるのが自分でもわかった。

「ま、まだだけど……」

「ほらやっぱりー」

「やっぱりってなんだよ！ 自分はボーボーかよ！」

「ボーボーですよ」

「……………っ」

思わず想像しかけたけれど、記憶のなかの寧々の裸でさえおぼろげなのに、そこに陰毛を重ね合わせることなんてできるわけもなかった。

（行けば見れる……ねーちゃんの裸もおっぱいも……ボーボーのあそこも……）

ふっと腕の力が抜けたのを観念したものと思ったのか、寧々はまた大地を引っばって歩みだした。

「でっ、でもっ！ やっぱりバレると思うから！」

「じゃあバレたらやめよ。すんなり番台通れたらねーちゃんとお風呂。それでどう？」

「わかったよ……ぜったいバレるから無駄だけどね……」

言いながら大地は、ことばとは裏腹に期待をふくらませている自分に気づいていた。

つづきは製品版で  
お楽しみください

## ■サークル「破滅乱淫オーガズム」作品一覧

\*2024年9月現在

### ◎既刊

- ① 委員長・静井莉子の露出自慰日記（優等生のカゲキないキぬき）
- ② ロリのふりして脱法露出！ 合法ロリでも外で脱いだら違法です!!
- ③ 露出体験告白1 イキすぎた公開絶頂
- ④ 着衣女性×露出男性勃起見せつけ体験集1
- ⑤ 時間停止能力を手に入れて露出オナニーを満喫してたら人生終了しちゃった話
- ⑥ 露出体験告白2 痴女たちの全裸淫戯（全裸になりたいわたしたち 露出体験告白2『改題』）
- ⑦ 身動きできない満員電車でロリたちに勃起を勝手に出されて射精させられた話
- ⑧ イメージビデオに出演したら挿入がないだけでほぼAVみたいな撮影だった話
- ⑨ 着衣女性×射精男性勃起見せつけ体験集2
- ⑩ イトコのねーちゃんに女湯で射精させられて家でエロいことしまくった夏の話

◎近刊

＊男は誰もがチンポの虜 兜合わせ体験集

＊怪淫譚 心霊絶頂体験集

＊露出体験告白3 公然のイキ恥さらし

＊娘がアダルトライブチャットをしていたのでエロirikエストをしまくった話

（近刊の発売順は変更になる場合があります）

★各電子書籍ストア、ダウンロード販売サイトにて発売中！

（ストア、サイトによっては規約の関係上、一部扱いのない作品があります）